SYÔNEN SYÔZYO

Sekai Bungaku Zensyû

[illegible]

[illegible]

少年少女世界文学全集

アメリカ編(2)

若草物語

オルコット作・吉田勝江訳

銀のスケート

ドッジ作・白木茂訳

12

少年少女世界文学全集12
アメリカ編 第2巻

昭和34年6月20日発行

訳者　吉田勝江・白木茂（よしだかつえ・しらき しげる）
発行者　野間省一
印刷者　北島織衛
発行所　東京都文京区音羽町3ノ19　株式会社講談社
振替口座東京 3930　電話大塚（94）大代表 3111

印刷　大日本印刷
製本　毛利製本
本文用紙　本州製紙
背皮　小林榮商事
クロス　日本クロス

定価　380円

© 吉田勝江・白木　茂　昭和34年
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

PRINTED IN JAPAN

目　次

少年少女 世界文学全集

第 12 巻
アメリカ編第2巻

若草物語

ルイザ・メイ・オルコット作
吉田勝江訳

第一章　巡礼ごっこ……11
第二章　たのしいクリスマス……25
第三章　ローレンス少年……37
第四章　重荷……52
第五章　おとなり……67
第六章　ベス、「美の宮殿」を見いだす……82
第七章　エーミーの屈辱の谷……91

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第八章　ジョー、魔王にあう……99
第九章　メグ、「虚栄の市」に行く……114
第十章　P・CとP・O……137
第十一章　こころみ……152
第十二章　ローレンス野営……168
第十三章　空中楼閣……195
第十四章　ひみつ……207
第十五章　電報……220
第十六章　手紙……229

第十七章　小さきま心……240
第十八章　暗い日……250
第十九章　エーミーの遺言書……261
第二十章　うちあけ話……269
第二十一章　ローリーのいたずらとジョーの仲裁……279
第二十二章　楽しき野べ……291
第二十三章　マーチおばさん問題を解決……300
銀のスケート……317

メリー・メープス・ドッジ作
白木茂訳

まずしい兄と妹……319
銀のスケート……323
しんせつな少女……326
消えたお金と、ふしぎなとけい……331
ブックマン先生に会う……336
スケート旅行……339
ハンスの苦しみ……345
おとうさんの手術……349
友情……354

なおったおとうさん……356
新しい心配……360
おとうさん、大すきなおとうさん……363
消えたお金のゆくえ……367
親友のアニー……370
ピーターの家で……372
仙女のおつげ……374
とけいのなぞ……379
とけたなぞ……383

スケート大会……388
かがやく優勝……395
よろこびの一家……399
うわさのたね……403
あかるい日ざし……404
おしまい……406
解説……408
白木茂
吉田勝江
読書指導……415
読書指導研究会
滑川道夫
斎藤喜門

装本　池田仙三郎
さしえ　三芳悌吉
谷俊彦
地図　池田仙三郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

若草物語

ルイザ・メイ・オルコット 作
吉田勝江 訳

若草物語について

たいていのお話では、主人公はひとりですが、この「若草物語」の主人公は四人の姉妹——それもみんな十代の少女たちです。映画で見たかたもあるでしょうが、あのゆかにひきずるような優美なスカートをはいていた九十年も前のこの少女たちは、服装をかえれば、そっくりいまのみなさんのような少女になってしまいます。

この物語が、まるでほんとのことのようにいきいきとしておもしろいのは、これが九十年前にほんとに生きていた少女たちのお話で、じっさいそんなふうにしてくらしていた生活を、だいたいそのままえがいたものだからです。二番めのむすめのジョーというのは、作者ルイザ・メイ・オルコット自身だといいますが、この本をよむ人はみんな、メグとジョーとベスとエーミーの四人の中に、じぶんに似た少女を見つけだすことでしょう。それというのも、この四人の少女たちが、むかしもいまも、世界じゅうのどこにでもいる少女だからなのだと思います。

(吉田勝江)

さしえ・三芳悌吉

第1章 巡礼ごっこ

「おくりものをしないんじゃ、クリスマスにはなりやしない。」だんろの前のしきものにねそべって、ジョーは不平をならした。

「びんぼうっていやねえ。」メグはためいきをついて、じぶんの古いきものに目をおとした。

「きれいなものをいっぱいもってる子もいるのに、なんにもない子もいるなんて、不公平だと思うわ。」末っ子のエーミーまで、ぷんぷんして鼻をならした。

「でも、うちにはおとうさまとおかあさまがいらっしゃるわ。それに、きょうだいだってあるし。」ベスは、すみっこでまんぞくそうにこういった。

だんろの火にてらされた四つの顔は、この楽しいことばをきいてあかるくなったが、ジョーが悲しいことをいったので、またくらくなってしまった。

「おとうさまなんていやしないんだ。これからだって、いつまでもあえやしないんだ。」ジョーは、「永久に」とまではいわなかったけれど、みんなは遠い戦場の父親のことを考えて、心の中でそれをつけくわえたのである。

ちょっとのあいだ、みんなはだまっていたが、やがてメグが調子をかえてこういった——。

「こんどのクリスマスにおくりものをやめようとおかあさまがおっしゃるのは、この冬は、どこの人たちにもつらい冬になりそうだからなんでしょう。おかあさまはね、兵隊さんが苦しい思いをしているのに、あたしたちだけ、じぶんの楽しみのためにお金を使うのはよくないと思っていらっしゃるのよ。あたしたちにはどうせたいしたことはできないけれど、小さなぎせいをはらうくらいのことはできるでしょ。それを心からするのでなくちゃいけないのね。でも、あたしにはできそうにもないわ。」メグは、じぶんがほしいと思っている、いろいろの美しいもののことをあきらめきれないように、頭をふった。

「といっても、あたしたちのすこしばかりのおこづかいなん

かなんの役にもたたないと思うな。みんな一ドルずつもってるだろう？　それをだしたって軍隊が助かるわけでもなしさ。あたしはおかあさまやあんたたちからなにかもらおうなんて思ってやしないけど、じぶんのお金で『水の精』と『シントラム』（二つともドイツ作家フーケーの作った物語）だけは買いたいと思うな。ずいぶん前からほしかったんだもの。」本きちがいのジョーはいった。

「あたしは新しい楽譜を買うつもりだったの。」ベスは小さな声でいってだれにも聞こえないようなためいきをついた。

「あたしはね、フェーバーの上等の色えんぴつを買おうと思うの。どうしてもいるんですもの。」エーミーはきっぱりといった。

「おかあさまは、あたしたちのおこづかいのことはなにもいわなかったじゃないの。なにもかもあきらめさせようってわけじゃないのよ。だからみんな、ほしいもの買おうよ。すこしくらいは楽しみがなくっちゃ。このお金もうけるんだって、みんなそうとう、こつこつやったんじゃないか。」と、ジョーはさけんだ。そして、まるで男の人のやるようなかっこうで、くつのかかとをしらべたりした。

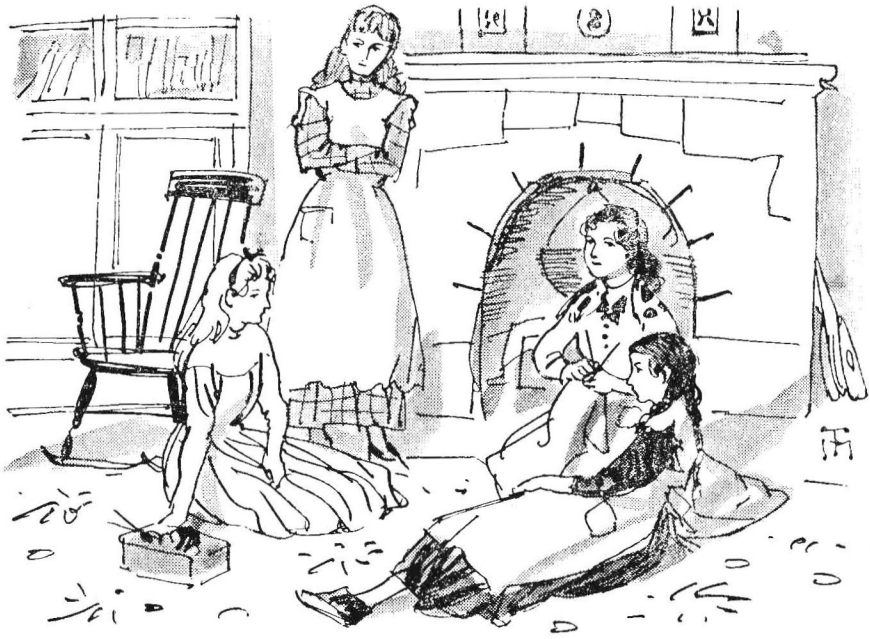
「あたしはたしかにこつこつやったわ、朝からばんまで、あのおそるべき子どもたちの家庭教師なんかして。」メグはまたもや不平そうにいいだした。

「でもおねえさまは、あたしのはんぶんも苦労してやしないよ。あの気むずかしやのうるさいおばあさんと何時間もふたりっきりでいたら、どんな気がすると思う？」

「いらいらするのはいけないことだけど――でもあたしも、おさらをあらったり、なにかをきちんとかたづけたりするのは、世界一いやなおしごとだと思うのよ。手がかたくなって、じょうずにおけいこができなくなるんですもの。」ベスはこんどはみんなに聞こえるようなためいきをついて、かさかさの手をながめた。

「あたしほどひどいめにあってる人はないと思うわ。」と、エーミーがさけんだ。「だってあなたたちは、勉強ができないといじめたり、きもののことやお鼻のかっこうをわらったりするような、なまいきな女の子といっしょに学校へ行かなくてもいいんですもの。」

「みんなもうおよしなさいよ。ねえジョー、あたしたちが小さかったとき、パパがなくしておしまいになったお金があっ



たらと思わない？」メグは、うちがよかったころのことをおぼえているのだった。

「おねえさま、このあいだ、キングさんのところよりうちのほうが幸福だっておっしゃったわね。キングさんのおうちじゃ、お金持ちだけど、いつでもけんかをしたり不平をいったりしてるんですってね。」

「そうだったわね、ベス。あたしたち、幸福なんだわ。たしかに、はたらかなくてはならないけれど、じぶんたちでおもしろくくらすことができるんですもの。ジョーがいうように、あたしたちは『ゆかいななかま』なんだわ。」

「ジョーさんたら、いつもへんなことばをつかうのよ。」と、エーミーがいったとたんに、ジョーは起きあがり、両手をエプロンのポケットにつっこんで口ぶえをふきはじめた。

「やめて、ジョー。男みたい。」

「だからやるんだ。」

「おぎょうぎの悪い人、きらい。」

「気どりやのこまっちゃくれ、大きらいさ。」

「あんたたち、ふたりとも悪いわ、ほんとに。」メグは姉らしくたしなめにかかった。「ジョーズィフィン、あんたはも

う男の子のようなまねはやめて、おぎょうぎをよくしなくっちゃだめよ。もうおとななんだってことをわすれちゃいけないわ。」

「おとなになるなんて、考えただけでぞっとするわ。ミス・マーチなんてものになって、長いきものきて、えぞぎくみたいにつんとすますなんてさ。とにかく、女の子だっていうのがいけないのよ。あたしは男でないのがくやしくてたまんないわ。いまはよけいにそうだわ。パパといっしょに戦争に行きたくてしようがないのに、うちにいて、よぼよぼばあさんみたいにあみものなんぞしていなくちゃならないなんて。」ジョーはこういって、青い兵隊くつしたを思いっきりふったので、毛糸の玉はころころとへやのむこうまでころがっていった。

「おきのどくね、ジョーさん。でも、どうすることもできないんだから、せめて名まえを男の子のようによぶことと、あたしたちの男きょうだいの役をすることでがまんしてくださらなくっちゃ。」といいながら、ベスはジョーのばさばさの頭をなでてやった。

「あんたもね、エーミー。」と、メグはつづけた。「あんたって、まったく気むずかしやで、それに気どりすぎるわ。あんたのようすは、いまはおもしろいわ。でも気をつけないと、だんだんにみえっぱりのおばかさんになりますよ。」

「ジョーさんがおてんばでエーミーがおばかさんなら、あたしはなあに？」じぶんもおこごとをちょうだいしようと思って、ベスがきいた。

「あんたはいい子。それだけよ。」メグはやさしくこたえた。これにはだれも反対しなかった。ベスはうちじゅうのお気にいりだったのだ。

本の読者は、「その人たちがどんなようすをしているか」知りたがるものだから、このまにちょっと、四人きょうだいのスケッチをしておめにかけよう。四人は夕がたのうすあかりの中にこしかけて、せっせとあみものをしている。外には十二月の雪が音もなくふりしきり、内には楽しげな火がパチパチと音をたててもえている。

しきものの色はあせ、家具はそまつだが、そこは気持ちのいい古いへやだった。かべには一つ二ついい絵がかかっているし、本だなにはぎっしり本がつまっていた。まどには、きくとクリスマスローズ（クリスマスのころさく白い花）がさき、平和な家庭の楽

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com